

## メディアファイロソフィー

### 第五回〈存在〉の苦しみに耐える

私は、ごく単純ながらも意味のある学究をしたいという望みを、かねがね抱いていた。それを讀むと、単になるほどと思うだけではなく、読んだ人の行動や思考の方向に微妙でも変化が生じてしまうような、そういった学究がしたのである。論述としてのおもしろさを減じる危険を覚悟して、あるいは馬鹿者と思われることを厭わずに、私はまずこんなふうにも、前もって論述の目的を知らせることからはじめて行こう。――

自殺が多い国というのは、おそらく「美しい国」でも「よい国」でもない。もちろん自殺者の数だけが問題ではないだろうが、それは「国の美しさ」や「よさ」を知る上での一つの指標値である。自殺率は、おそらくその国がそれだけ住みにくいということの現われであり、その住みにくさは、自殺をしない人の肩にもひしひしとのかかっているはずだ。私たちは「美しい国を目指す」といった雲をつかむような漠然とした目的ではなく、「自殺率を減らす」などという具体的な目的をいくつも持ち、それを達成していかなくてはならない。そしてそれを可能にする者たちを代表者として選んでいく必要がある。

総務省統計局「世界の統計2007」によれば、二〇〇四年の日本における自殺率（十万人あたりの自殺者数）は二三・七で、調査データのある三十九ヶ国中で四位である。一位はハンガリーで、以下、韓国、ウクライナ、日本、の順である。

日本国内での数字を見ると、全年齢層の総計では、自殺は死因順位の五位までには入っていない。しかし、二十歳から三十九歳までの層（五歳区切り）では、自殺が死因の一位となっている。四十歳より上の年齢層で自殺以外が死因の一位となっているのは、癌などの他の原因で亡くなる人の数が相対的に多くなるからである。実際には、自殺を死因とした人は「三十五歳～三十九歳」の層で二百五十三人（二位）、「四十歳～四十四歳」の層で二千二百三十八人（二位）だ。その上の層でも事情は同じで、年齢が上がるにつれて、むしろ自殺者数そのものは増えている。

一 オノレ・ド・バルザック (Balzac, Honoré de) 「ことづけ」『知られざる傑作』(岩波文庫)冒頭による。「私は、ごく単純ながらも実物の物語をしたいという望みを、かねがね抱いていた。それを聞くと、若い恋人同士が恐怖におそわれて、ちょうど森のほとりで蛇に出会った二人の子供が抱き合うように、お互いの胸をよりのむ、そういった物語がしたいのである。話の面白さを減じる危険を覚悟して、あるいは馬鹿者と思われてもかまわずに、私はまずこんなふうにも、前もって物語の目的を知らせることから始めて行こう。」

二 二〇〇七年八月当時の首相は安倍晋三。その著書に「美しい国へ」(文春新書、二〇〇六)があり、政権発足当時は、さかんにこの言葉を使っていた。読んだことないけど。

自殺する理由は人それぞれだ。病苦や生活苦によるものもあるだろうし、漠然とした不安感や閉塞感によるものも少なくないだろう。共通しているのは「死」を問題解決の手段として採用していることぐらいである。

映画『ゴルゴ13』『白夜は愛のうめき』では、トラブルに見舞われた飛行機同乗女性の「私は生きようが死のうが、どうでもいいんです……」というつぶやきに対して、ゴルゴ13がこう返答する。「死ぬことでいまわしいと思っている世の中と別れ、安らぎを得られるならば……この考えは、生きていて楽しいことがあるならば生きていたい、という欲望の裏がえしだ……」。きみのは、けつして無感覚になっているのじゃあない……<sup>四</sup>冷やかだが、珠玉の言葉である<sup>五</sup>。とは言うものの、その後、ゴルゴ13はその女性の悩みにつけこむ形で愛を交わし、ストーリーの最後では射殺してしまう(おいおい)。よい言葉も「台無し」……というわけではない——ゴルゴ13は「エロスとタナトスの物語」だから。

フロイトは、「生の欲動(エロス eros)」と対立関係をなすものとして「死の欲動」を考えた。人間の精神の奥底には、「生きつづけたい」とする欲動とともに、「死にたい」とする欲動も存在しているという。これは一見すると突拍子もない考えに思われるらしく、意外と評判が悪い。俗に「エロスとタナトス」と組にして説明されるものであるが、フロイトが「死の欲動」について論じた論文「快感原則の彼岸<sup>六</sup>」にはタナトスという言葉は出てこない。タナトス (Thanatos) という用語は、フロイトの弟子の一人であり、かつては患者でもあったシユテークル<sup>七</sup>が導入した概念である——シユテークルの死因は「自殺」だったのだが——。

## 2

三 たぶんゴルゴ13は構造主義者である。このように「辛いこと—楽しいこと」という二項対立の概念をもとに思考するのは、構造主義の基本的枠組みだ。つまり「楽しいから、生きる」という論理と、「辛いから、死ぬ」という論理の根は同じということ。「どうでもいい」わけでは決してなく、快樂・安楽を強く求めており、それが得られないことによる不満が抑鬱の原因だと指摘する。

四 さらに、ゴルゴ13は臨床心理学を学んでいると思われる。「……どうでもいいんです」という彼女のつぶやきを聞き、それが「自分は無感覚・無感動・無感情になっている(つまり涅槃の境地にある)」と主張したいということを察知している。そして前述のように、それが論理的に誤っていることを指摘する。

五 これが珠玉の言葉であるのは、「きみのは」という一言にもよる。つまりゴルゴ13自身は、「生きようが死のうが、どうでもいい」と感じている。彼は、生と死に対して「無感覚」になりつつある自己を認識し、そこから脱却しようとしている。だから「自分のはそうだが、きみのは、違う」という言い方になる。そしてさらに、だからこそ、その女性の述懐に強く反応したとも考えられる。

六 フロイト『自我論集』(竹田青嗣・中山元(訳) ちくま学芸文庫) ,pp.113-200.

七 ヴィルヘルム・シユテークル(Stekel, Wilhelm)。邦訳に『性心理の分析』(新流社)など。

八 "Comprehensive dictionary of psychoanalysis" の [Thanatos] の項目によれば、一九〇八年

「黒」という概念は、それと対立関係をなす「白」があつてはじめて成立するものであり、同様に「生」という概念はそれだけで単体で意味を持つのではなく、「死」という対立概念の存在によつてはじめて意味を持つ。このような考え方は「関係論九」とも呼ばれ、言語哲学や構造主義哲学の基礎をなす概念でもある。生と死が対概念<sup>二〇</sup>である以上、「生の欲動」があれば、それと表裏一体をなすものとして「死の欲動」が存在する。フロイトの考えかたは、きわめて「構造主義的」である。

と、簡単に書き出したものの、死の欲動について書かれたフロイトの「快感原則の彼岸」の第五章以降の難解さは、まさに壊滅的ですからある<sup>二一</sup>。死の欲動は「自我欲動」によつて駆動され、生の欲動は「性的欲動」によつて駆動されるという。生の欲動に関しては、あまりひつかかりもなく理解できる。「生きる」ということは肉体的快楽を謳歌することに等しく、生きる欲望とは性欲によつて駆動されるということだからだ。フロイトのこの「性欲」を「生」の中核に置く考え方を快く思わない人たちがいるのも事実だが、具体的な私たちの生のありさまを観察してみれば、それを否定する要因を見つけないことの方が圧倒的に困難であるだろう。もちろん、超自我によつて規制を受けているので、「性」が生活の前面に如実に出てくることは少ない。

ここでフロイトは、「自我」とは「命のない状態に戻ろうとする」欲動を持つものだと考える。「これまでの経験から、すべての生命体が〈内的な〉理由から死ぬ。すなわち無機的な状態に還帰するということが、例外のない法則として認められると仮定しよう。すると、すべての生命体の目標は死であると述べることができ。これは、生命のないものが、生命のあるもの以前に存在していたとも表現することができる。<sup>二二</sup>」だから「自我」は、生命の無い状態に戻ろうとする駆動因をあらかじめ持っているのだという<sup>二三</sup>——オカルトっぽく見えるかもしれないが、少し我慢し

---

にシュテークルがこの用語を使い始め、後にパウル・フェダーン (Federn, Paul)(自我心理学で有名) が提唱した概念である。<sup>二四</sup> Ernest Jones, 1957, *The life and work of Sigmund Freud, Volume III, NY: Basic books* (邦訳『フロイトの生涯』には書かれてある)と書かれている。引用の引用の引用なので、心もとないが。

カソシュール『一般言語学講義』を端緒として展開された考え方の枠組み。言語の機能を考えるうえで、内部表象同士の「関係」が重要であるとされる。外部世界の「実体」を考えなくてもよい、とすることから「反実体論」とも呼ばれる。

<sup>二〇</sup>二項分離概念、もしくは二項対立とも。英語では dichotomy。二つの事物を対比的に描くという意味で、絵画技法の用語としても用いられる。

<sup>二一</sup>また宣伝みたいになるが、詳しくは拙著『難解な本を読む技術』(光文社新書) 参照。

<sup>二二</sup>「快感原則の彼岸」(フロイト『自我論集』, p.162.)

<sup>二三</sup>これ、とてつもなく凄いいことを言っている。「生命のない何か」が、「生命以前に存在して

て読み進んで欲しい。

この考え方は、レヴィナス<sup>二四</sup>の「受肉」と同じである。「受肉」とは、剥き出しの「言葉・論理・情報」が、肉体を得ることを指す。自我とは論理であり言葉である。受肉した言葉は生に束縛され、生から解放されることを希求する。それが死の欲動であるのだが、それは決して「自己破壊」という側面ばかりを持つのではない。死の欲動／タナトスを、単に「自己破滅的な欲求の駆動因」と考えると、足をすくわれる。自我もしくは論理／言葉こそが死の欲動の原因なのであるから<sup>二五</sup>。

フロイトやレヴィナスが見た「彼岸<sup>二六</sup>」は、私にとっては限りなく遠い向こう岸であり、そこに到達することなどまったく覚束ないが、霧にかすむその彼岸の概形ぐらいは見たいと考えて来た。受肉した「論理」は、その受肉という現象そのものによって自らを敢て束縛の中に置いた。そして、その束縛から解放されることを求める過程において、それぞれの人間は、それぞれの論理を展開する——人は、言葉（論理）によって生きる存在でもある。

人が自らの生を断ち切るという選択肢を封殺することはできない。誰でも自由に「死」を選択できる可能性が残されていなくてはならないが、その選択は合理的なものでなくてはならない<sup>二七</sup>。もちろん「合理的なものを考えることができるなら、自殺などしないはずだ」という意見にも一理がある。人が自殺するのは「非合理的」な感覚にとらわれたときだというわけだが、人は「非合理的な選択」をできない。たとえ他人のものを盗んだ人間であったとしても、「盗む」という判断をしたこと自体は「合理」である。「それが犯罪であることは知っていたが、見つからなければよいと考えた」というものや、「見つかって罰を受けても、死ぬよりはマシだと考えた」というものは、決して「非合理」ではない。このときの「合理」とは、社会一般に存在する「理」に基づくものではなく、その個人の内部における「合理」である。人間は、自分の内部で非合理とされた行為を遂行することはできないということ

いる」とは、どういうこと？ 物質と精神という二分法については前回も問題にしたが、難問だよ。

<sup>二四</sup> エマニュエル・レヴィナス (Levinas, Emmanuel)。難解な思想として知られるが、最近新訳が出た『全体性と無限(上・下)』(熊野純彦訳、岩波文庫、二〇〇五)は、かなり読みやすい。内容が難解であることにはまったく変わりないのだが……。ちくま学芸文庫の『レヴィナス・コレクシオン』がお勧め。

<sup>二五</sup> 生を駆動するのも、言葉であり論理である。

<sup>二六</sup> 前述フロイトの論文「快感原則の彼岸」の原題は“Jenseits des Lustprinzips”であり、つまり「快感原則を越えて」。英訳も“Beyond the Pleasure Principle”とほぼ同じ調子。これを「彼岸＝彼方の岸」と訳したのには感嘆。

<sup>二七</sup> ここらあたりの事情については、拙著『私』のための現代思想』(光文社新書)を参照。いい本だと思っただけど、売れないねえ。

だ。そのような人間の存在を考えるのはとても難しい。「やってはならないことであるし、やりたいとも思わなかったが、やってしまった」ということであれば、それは「自己の意志を超えた外部の何かに支配されていた」ということになってしまう——オカルトだ。

完全な知性など存在しないのだから、私たちは誰でも幾分かは「社会的には」非合理的」な存在である。しかし同時に私たち人間は、私的には「完全に合理的な存在」である。

その意味で、人間は「個人的な内部の論理としては」合理的」に死を選択することがある。自殺を「非合理的行為」だと考えてはならない。

ハイデガー<sup>一八</sup>は、世界劇場という概念装置を使い、私たちの生のありさまについて考えた。私たちは何らかの役割を演じつつ生きている。ちなみに私は、家に帰れば夫を演じ父を演じ、大学に行けば教員を演じ研究者を演じ、街に出れば飲んだくれを演じオヤジを演じる。それらの役割を演じている状態を「名刺的自己」と呼ぼう——「飲んだくれオヤジ」は名刺には記載されていないけれど。それは「仮面 (persona)」とも呼ばれ、また、人格とも呼ばれる。人格 (personality) とは、この仮面をかぶった状態のことを指す。この名刺的自己を取り去ったところに、私たち人間の「核」が存在するという。それは「現存在 (Dasein)」と呼ばれる。

一方、私たちは日々の生活の中で、役割に耽る。名刺的自己に埋没し、それによって幾許かの幸福感を得ている。ハイデガーはそれを「耽落／頹落 (verfallen)」と呼んだ。そしてこの耽落に失敗したとき、つまり「名刺的自己」を上手に演じることができないとき、人は、この世界劇場から降りることを考えるようになる。これはむしろ当然のことである。現存在は「自我」そのものだからだ。耽落していないとき、自我欲動が発現し、死への道へと進み始める——だから「耽落」には決して悪い意味が付随しているわけではない。「頹落」よりも「耽落」という訳語がふさわしいとされるのは、その理由による<sup>一九</sup>。

ちなみに、最近話題<sup>二〇</sup>のグッドウィル・グループの会長兼 CEO である折口雅博氏が一九九四年に立ち上げたクラブ (ディスコ)「ヴェルファール」の綴りは *verfare* である。私はこれを、ハイデガーの用語である *verfallen* (耽落) のもじりである<sup>二一</sup>

---

<sup>一八</sup> マルティン・ハイデガー (Heidegger, Martin)。『存在と時間』。

<sup>一九</sup> 古東哲明『ハイデガー―存在神秘の哲学』(講談社現代新書) 一〇三頁あたりに詳しい。これは、「世界劇場論」を中心としつつ、ハイデガーの存在論的解釈学を解説する良書。

<sup>二〇</sup> 二〇〇七年六月当時のこと。グッドウィル・グループの子会社であるコムスンが介護報酬の不正請求によって、厚労省から処分を受けた。また、データ装備費問題や二重派遣問題などが問題視されていた。

勝手に考えていた。「と」を入れ替えたところなど、とても小賢しい、と。本人の書いたものによると「ヴェルサーチ」「フェラーリ」「アルマーニ」を合成して作ったものだということだが、もしもそうなら「ヴェルフェール／velferr」だろ。少しは哲学を学んだ人間がこの名前を考案し、それに適当に理由をくつつけたというほうがしっくりくる。ただ、悪意の潜む名前だからそうは言えなかった——若者が集い酒を飲み踊る巨大な空間に「耽落／頹落」という名前を付けているわけだからね。洒落が効きすぎ。

酒を飲んだり踊ったりすることは耽落なのではない。社会人を上手に演じることも耽落であり、よい教師を演じることも耽落である<sup>三〇</sup>。しかしときとしてその名刺的自己の裏側にある現存在が顔を出し、耽落している自己に冷や水を浴びせる——お前はそんな者ではない、と。

耽落がうまくいくか否かは自分では決められない。どんなに一生懸命演じようとも、「それではダメ」と周囲に感じられれば、その世界から弾き飛ばされる。さらには、自分が率先して選んだのではない「役割」を不承不承演じているにも関わらず、ヘタクソとなじられたりもする。幼稚園の頃のお芝居で「森の木（その二）」という役をもらったときのことを思い出す。「森の木（その一）」の子がずいぶん羨ましかったつけ——でもそれだって本当は羨ましがするような役柄ではないのだが。どんな人間でも、その名刺的自己は不承不承のものであり、決して理想のものではない——たとえ大統領だろうが首相だろうが大臣だろうが。

耽落を率先して勧めるわけではないが、人はある程度までは耽落して「生きて」いかななくてはならない存在だろう。この世界劇場において、その演劇をうまく運営するのが〈管理する者〉の役割だ。娯楽を提供しろと言うのではない。人が、それぞれの役割をそこそこうまく演じていると感じられる舞台を用意することが必要とされている。「生かす」のではなく、「活かす」ということ。それだけが、〈存在〉の苦しみを、幾分か和らげることができる。

そしてこの国では、大臣までもが自殺する<sup>三一</sup>。

国政選挙に近い<sup>三二</sup>。この国はすでに、かなりの能力を傾注しないと立ち直れないほどの危機的狀態にある。美辞麗句を並べただけで、その実、具体的な中身の無い選挙公約にはもううんざりだ。もちろん、何の知識も能力もないタレント議員などを並び立てて、それで「勝てる」と考える各政党の姿には、悲しみさえ覚える。私たちは明らかに馬鹿にされている。それでもきつと勝つだろう——馬鹿にされてい

---

三二 つまり私（高田）は「耽落」できていない、ということ。まだまだだな。

三三 二〇〇七年五月。松岡利勝農林水産大臣のこと。事務所費問題を苦にしたと言われている。

三四 二〇〇七年七月二十九日、第二十一回参議院議員選挙。

ることにさえ気付かないほど馬鹿だから。私たちの日常生活の場を巧妙にしつらえられた「劇場Ⅱ生の場所」とすることを考えなくてはならないのに、彼らは政治の場を三文芝居の劇場にすることばかりを考える。

とは言うものの、自殺を考えている人たちを止める権利は私にはない。それだけではなく、その資格もないし、さらにはその技術もない。しかし、技術はさておき、その権利と資格を持っている人は必ず存在する。その人と出会い、その人のことを想う人たちである。そのような人たちは「人の生きる場所」を作ることができる。どこにも「行き場所／生き場所」が無いと感じたときに、自分の役割がないと感じたときに、人はこの世界という舞台そのものから降りようとするのだから。

社会が無策である以上、個人にできることは、「あなたは死なないでね」と、そつとささやくことしかない<sup>二四</sup>。究極の非論理だが、論理を超えたところに存在する真実もある。

(初出 『文學界』二〇〇七年八月号)

---

<sup>二四</sup> バルザック「ことづけ」末尾による。「この出来事を聞かされたひとが、こわがって、読者を抱きしめて、こんなふうに行ったとしたら、どんなにか愉快だろう。——「ああ、死んじやいやよ、あなたは！」」